

関係性を楽しむ

〜相手とどう向き合うのか〜

「機械は人間ではないから感情がない」のは事実だが、時に「おかしいなあ、今日は機械の機械が悪い」と感じることはないだろうか。私は機械を生き物のように感じることを魅力的に思う。人間と機械は全く異なる存在ではあるものの、不具合が生じた場合など、お互いを思い遣るかのような温かな繋がりを感ずるからだ。

これは、人間同士のコミュニケーションにも通じるように思う。例えば家事や育児など、正解のない事柄については、同じ家庭、同じ子どもに関わる当事者同士でも、求めるものやそのレベルが異なることがある。このことで、「コミュニケーションに食い違いが生じる経験は誰にもあるはずだ。他者との間に努力では埋められない違いが生じる場合、どうすればいいのか。単に妥協するのではなく、コミュニケーションを通じて相手とどう関わり、納得し、理解し合うことに繋がられるかということを考えてい。

ヴィンテージバイクの世界

今回、ヴィンテージバイク専門店の「ローリングスモーターサイクルズ」を主宰する外岡正行（とのおかまさゆき）さん（掛川市）に話を聞いた。

ヴィンテージバイクには、プラスチックを多用した現代のバイクにはない、年月を経た金属が醸し出す独特の雰囲気があり、人々を魅了する。ヴィンテージバイクのオーナー（以下「オーナー」という。）はあえてその状態を「味」や「風合い」として楽しみ、乗り続けるために、現代のバイクが技術進化の過程で解決してきた問題と上手く付き合っていかななくてはならない。よって、外岡さんにはその特性をオーナーに理解して貰った上で、安心して乗り続けることのできる環境を提供することが求められる。

楽しむための共通認識を作る

ヴィンテージバイクの雰囲気は惹かれ、外岡さんの店を訪れる客は少なくない。しかし、前記の理由から、初めての客への対応は特に重視しているという。

「長く、楽しく乗り続ける環境を提供することが一番の目標です。時



雰囲気のある作業場での外岡さん

間を掛けて良い点、悪い点を丁寧に説明し、自分で適性を判断して貰えるよう心掛けています。それなりの値段がする嗜好品ですから、途中で手に負えず嫌いになってしまっても悲しいので」

いざ手に入れても、乗り続けていればトラブルはつきものである。修理を行う際に外岡さんが意識するのは、オーナーとどこまで共通認識を築くことができるか、ということだ。それはヴィンテージバイクならではの「不便を楽しむ」という価値観のもと、結果的にオーナーが求める最適な修理方法を探ることに繋がる。

「単に走る状態にすることだけを目的とするのであれば簡単です。極端に言えば、丸々新品に交換すれば良い。しかし、実際には古い技術の味、製品の持つ風合いなど、車両全体のバランスをオーナーと綿密に相談しながら行います。あえて当時の技術にこだわるなど、オーナーからの要望は様々ですから」

信頼関係を築くのもコミュニケーション

ヴィンテージバイクの専門店という、職人的で近づき難い空間を想像してしまう人は多いだろう。実際、自身のスタイルを崩さずに、それを受け入れるオーナーだけを相手にする店は多く、コミュニケーションを重視する外岡さんのスタイルは異質だ。同業者との競争やオーナーとの信頼関係の築き方については、どのように考えているのか。

「狭い業界ではありますが、修理技術の好みでオーナーが店を選択する余地は十分あるので、競争は非常に激しいです。一方的に『ウチの直し方はこれ』と技術のみを示して営業するスタイルであれば、他の店を選ばれた時のダメージは少なくなるでしょう。そのような方針を貫く同業者の気持ちは理解できませんし、全く否定する気持ちはありません。しかし、私は手掛けたバイクの面倒をずっと見続けたいので、オーナーとの密なコミュニケーションは必然的に重要だと考えます。とりとめもない雑



素敵なヴィンテージバイク達

プチバトル

- 夕食をさあ食べよう!という時。子どもが「給食もお魚だったからイヤ!」と拒否!大急ぎで作ったこちらのイライラもマックスで食卓が修羅場に。
- これからは給食表をちゃんと確認することを約束して、仲直りのハグをしました。(ペンネーム:プリキュアの母)

談から、大げさに言えば価値観、人生観の一部を感じ取り、店とバイクとオーナーの3方向から歩み寄るポイントを発見することもあります」

【一方的に正解を定義したくない】

当時の技術を再現するのか、雰囲気を重要視するのか、機能を重要視するのか、求められる修理方法は様々だ。オーナーとの間に築いた共通認識のもと、修理方法の着地点を決める外岡さん。

「もちろん、安全性など絶対にこだわらなければならぬポイントはありますが、『正解を定義したくない』という考えが私にはあります。私生活において家族とコミュニケーションを取ることも同じで、個人的なこだわりを相手に求めることはほとんどありません。どんな時でも、意識するのは『楽しむこと』です。子どもと意見が異なる場面でも、可能な限り本人の主張を活かし、チャレンジに伴う諸々の経験を皆で楽しみたいと考えています」

【この仕事が家庭に及ぼす影響について】

外岡さんには、妻と二人の小学生の子どもがいる。個人経営のバイクショップには珍しく、妻は別に仕事をもち、店に出てくることはほとんどない。仕事における経験が、私生活へ影響することはあるのだろうか。「仕事の経験と家庭での役割との関係性について、共通するのは『当事

者意識を持つ』ということでしょうか。家族とも、良いことだけでなくトラブルも含めて『自分ならこう楽しむ』といった考えで接している気がします。仕事も家庭も、トラブルに対してはトライ&エラーの繰り返しです。例えば、適正な修理を行ったとしても、それがオーナーの乗り方に合っていないことで故障に繋がるのであれば、最善の方法ではなかったということですね」

「店舗を持って16年が経ちましたが、家族との時間も大切にしたいので、営業時間を午前8時から午後6時までと開店・閉店を早めに設定しています。こんなに朝早くから営業するバイク屋は珍しいと思いますよ。仕事が終わった後は、子どもの習い事の送迎や家事を妻と分担しています。今、一番楽しいのは、子どもが習っている陸上教室で一緒に汗を流すこと。一緒にマラソン大会に出たりもするんですよ」

家族との話もたくさんしてくれただが、バイクと同様、子育てが「好きだ」というだけあって、話をする外岡さんの口調も実に楽しそうであった。ちなみに、「一緒に走るのほもうすぐ中学生になる長女である。」

【編集員・平岡の場合】

そもそもコミュニケーションとは何なのだろう。大辞林第三版(三省堂)には「人間が互いに意思・感情・思考を伝達し合うこと。言語・文字その他視覚・聴覚に訴える身振り・表情・声などの手段によって行う」とある。すると「伝達し合うこと」までがコミュ

ニケーションであり、そこから先の「共感・理解」などの心の動きまでは含まれない。しかし、私たちは普段の生活の中で、「共感・理解」までを含めてコミュニケーションと捉えているのではないだろうか。我が家・平岡家の洗濯に関する一連の行為を例に考えてみる。

まず洗濯を始める前に、①ネットに入れて洗うもの、②裏返しで洗うもの、③そのまま洗うもの、④おしやれ着洗いで別洗いするもの、に区分する。続いて洗濯が終わった後は、①日向で干すもの、②日陰で干すもの、③室内で干すもの、に区分する。最後に片付けるときは、①折り畳んで仕舞うもの、②ハンガーに掛けて仕舞うもの、③そのまま使うもの、に区分する。

これは夫婦が共同生活を始めてからのコミュニケーションによる決定事項で、日常的な些細な行為である。が、10年以上を経た今でも私と妻との間で感覚が異なり、「こうした方がいいんじゃないか」と共感を求めて議論になることがある。車の運転、料理といった家事は、感覚のほかに、センスや能力といった要素が絡むため、「こうした方がいいんじゃないか」と言いたくなる確率は更に高くなる。

相手との感覚の違いを感じた場合、相手とどう向き合うのか。そんな時、私は多様性や寛容性の意味について考える。「今時洗濯なんて人でなくてもできる。それぞれのやり方があるのだから一緒にやらない方が快適だ」と、多様性を認めた上で「バラバラにやっちゃいましょう」ということが起きたら、それは本当に寛容な関係と言えるのだろうか。

【楽しい繋がり】

誰でも自分の立場を支えている価値観に頼って、自分の考えと異なる価値観は見なかつたり、否定したりして済ませたほうが、一時的には楽な筈である。しかし、あえて「こうした方がいいんじゃないか」と共感を求め、逆に和を乱すことになっても議論してしまうのは、皆が繋がり大切さを無意識のうちに理解していて、人と人が協力し合い、助け合わないと生き残っていくことが難しいと感じていることの表れではないだろうか。

先日、子ども達が糸電話を作り、会話を楽しんでいた。その様子を眺めていた私は、子ども達が楽しんだのは会話の本身ではなく、糸電話の遊び自体であり、コミュニケーションの動機、本来の目的である、「関係性を楽しむ」という共通認識であると感じた。私が憧れるのは、まさにそのような関係だ。これからも私たち夫婦は、共にあることの楽しさを感じ続けるために、些細なことにも議論を重ねていくことだろう。(平岡慎也)



楽しく糸電話で繋がる子ども達

プチバトル

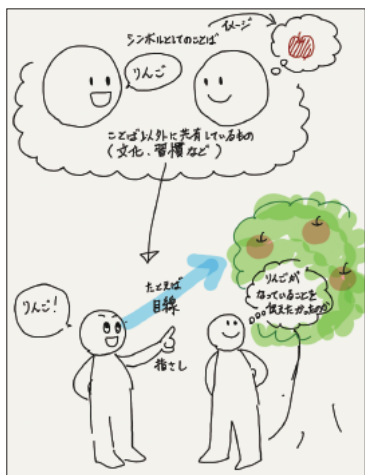
●夫婦になって30年余り。今や夫は私のお世話係と化してなんやかやと世話を焼く。ひとりで何でもできるからと言ってもやめる様子はない。→私が甘んじて夫の世話を受け入れている。義母は私に「よく飼いならんだ」という。なにせ20年もかかっているのだ、お世話係の教育は。(パンネーム：うらん738)

生き抜くためのソーシャルスキル

～コミュニケーションはいつでも学び直すことができる～

コミュニケーションは社会参加への鍵であり、誰にとっても生まれ落ちたその瞬間から必要となるものである。脳のつくりは一人ひとり異なり、コミュニケーションの得意不得意にも個人差がある。澳塩渚さんは、学習支援教室「まなびルーム ポラリス」を主宰しており、いわゆる「発達に気になる子(注1)」を対象とした学習及びソーシャルスキル取得の支援に取り組んでいる。澳塩さんの言葉は、コミュニケーションに困難を感じる大人にも通じるものがあるはずだ。子ども達に対する基礎的な支援を通して、老若男女誰もが生きやすくなるための、普遍的なコミュニケーションスキルを探りたい。

(注1) 発達障害等の診断の有無にかかわらず、学習面または行動面において困難を抱えている子ども。



コミュニケーションの仕組み

(注2) 例えば、「お茶」といっても、水筒に入った麦茶を指すこともあれば、湯のみのお茶を指すことも、また茶葉のようなものを指すこともあり、どれを指すかは会話の前後の文脈で変わる。
(注3) 言葉よりイメージがはっきりしている絵カードや写真などを使って、コミュニケーションを図る方法に付けるなどの方法が取られる。

子どもが、生まれて初めて学ぶのも、コミュニケーションです。子どもは保育者に世話をされる中で、視線の共有、指差しによる注意の共有などを通じてコミュニケーションを学んでいきます。

言葉は中心にあるものですが、あくまで具体的な情報という実物の代わりに使われる、シンボルとしての意味しかありません。言葉をやり取りしつつも、しぐさや視線、その背景にあるルールや習慣、文脈などを共有することが重要となります。

コミュニケーションとは、キャッチボールに似た、二人以上の間で交わされる情報の交換です。共有したい、伝えたい情報がボールです。情報の送り手が投げたボールを受け手がキャッチし、ボールを投げ返します。ボールには「知識」「感情」などの種類があり、受け手は適切なボールを投げ返さなければなりません。

いわゆる「発達に気になる子」のコミュニケーション支援

こうした理由から、「発達に気になる子」にはコミュニケーション能力が育ちにくい訳ですが、もちろん子どもが悪い訳でもありません。受け取る大人が悪い訳でもありません。近年、医療や教育の現場等で「療育(治療教育)を早期に」と言われる理由は、こうしたコミュニケーションの困難さ、手掛かりの無さによる困難を滑らかにするためです(注3)。発達のグラデーションの中で、単にカンが強い子なのか、何らかの支援が必要な子なのか、明らかにするためでもあります。

しかし、「発達に気になる子」の中には、「視線」や「指差し」といった言葉の代わりになる動作を言葉のように扱うことが難しい子がいます。また、音や光といった、周囲の情報の取捨選択を脳が処理しにくいため、それらの刺激による苦痛が邪魔してコミュニケーションが困難になる子もいます。また、言葉を聞いても、それが具体的に何を指すのかわかりにくいいため、言葉がコミュニケーションの手掛かりにならないパターン(注2)もあります。

コミュニケーションとは、キャッチボールに似た、二人以上の間で交わされる情報の交換です。共有したい、伝えたい情報がボールです。情報の送り手が投げたボールを受け手がキャッチし、ボールを投げ返します。ボールには「知識」「感情」などの種類があり、受け手は適切なボールを投げ返さなければなりません。

子どものうちでできるコミュニケーション学習

支援が必要な子どもは、コミュニケーション能力の問題から、本来、生活や遊びの中で獲得すべきスキルが育ちにくくなります。この教室学習支援教室「まなびルーム ポラリス」は、知らなかつたことを知ること、それまでできなかったことを、学ぶ場でもあります。

例えば、コミュニケーションにもルールが必要だということ。気になる子の中には「世間話のボールを知識で返してしまう」といった問題があります。前述の通り、言葉の背景にあるものを読み取るのが難しいのです。その場合は、コミュニケーションにおける暗黙のルールとなっているものを見える形にして、実際に「知識」「共感」等と書いたボールをやり取りして練習することもあります。

また、タイミングを取ることが難しい子どももいます。テストの前の休み時間、皆が勉強をしている中で別の話をしようとする子。これは、「こんな時には黙ってテストに備える」といった、明文化されていないけれども子ども達が共有しているルールを、学ぶきっかけがなかったことが背景にあります。

こうした場合、まずはルールを明文化して伝えます。これは、10歳位から可能だと言われています。この年代は、自分が何をしようとしているのか客観的に捉えられるようになる時期だからです。これより小さな年齢の

支援が必要な子どもは、コミュニケーション能力の問題から、本来、生活や遊びの中で獲得すべきスキルが育ちにくくなります。この教室学習支援教室「まなびルーム ポラリス」は、知らなかつたことを知ること、それまでできなかったことを、学ぶ場でもあります。

支援が必要な子どもは、コミュニケーション能力の問題から、本来、生活や遊びの中で獲得すべきスキルが育ちにくくなります。この教室学習支援教室「まなびルーム ポラリス」は、知らなかつたことを知ること、それまでできなかったことを、学ぶ場でもあります。

支援が必要な子どもは、コミュニケーション能力の問題から、本来、生活や遊びの中で獲得すべきスキルが育ちにくくなります。この教室学習支援教室「まなびルーム ポラリス」は、知らなかつたことを知ること、それまでできなかったことを、学ぶ場でもあります。

プチバトル

●孫娘(小3)からおばあちゃん(私)にメモが、ダイエツ食品のCM中「いいから、あなた早くここに電話してこれ買いなさい!」と。思わず私「あなたねえ...!」
→後から、家族に報告し、観察力を褒めることで成長を喜ぼうということに収まり、彼女にはお咎めなしとなった(笑)(ペンネーム:POPORON)

子どもは、暗黙のルールといったものはまだ意識しにくい傾向にあります。

衝動的に喋り過ぎてしまう子には、いつならいいのか相手の意思を確認するように教えます。また、こちらの意志を確認しないで喋りかけられたような時には「ちよつと待って」ではなく、明確に「10秒待って」というように伝えたりもします。練習が必要な場合、学習支援の中で質問前に意思確認をするといったルールとして取り入れることもあります。

大人になった「気になる子」の捉え方

発達が気になる子ども同様、大人になった「気になる子」も、同様のコミュニケーション上の問題を抱えています。仕事をすることで企業は、組織独自のコミュニケーション、不文律を読んで動ける人材を求めているからです。やり過ぎると忖度になります。

また、雑談が苦手、という人も多くいます。こういう人は、いわゆるグループミニング（注4）の場に知識のボー

ルを投げ込むような、タイミンクの悪さやズレを生じさせてしまうのです。

（注4）動物の毛づくろいに例えられる、お互いに敵意が無いことを確認しあうやり取り。

大人になってからもできるコミュニケーション学習

大人になった「気になる子」も、コミュニケーションを取ることは難しくても、それを円滑にするための方法を知ることができます。雑談に目的は無いから難しいとも言われますが、「今何のボールが投げられたのか」判断することはできるでしょう。前述の通り、同じボールを投げ返せばいいのです。

ただし、コミュニケーションにおいては、同じボールを投げるにしても「速度」の問題があります。相手と同じスピードで、かつ自分だけが投げ続けることがないようにしなければなりません。やり取りの中で、キャッチボールがドッジボールにならないように、タイミングや量の問題も考える必要があります。



コミュニケーションの成立

一方で、「発達が気になる」当事者にとっては「上手くできなくてもいい場所」も重要です。自分と似たコミュニケーション上の特性を持つ当事者の会や趣味の会など、各人が好きな勝手なことをしていても許される、できれば失敗しても気楽な、毎回同じメンバーではない人が集まる場所があればなお良いでしょう。

コミュニケーションが苦手な人への接し方のヒント

伝達事項について、曖昧にされがちなことにはフォークラスすることも重要です。職場等では、指示する際「この書類、ちやちやつと片付けて」等、文脈から読み取れるだろうと期待するのではなく、「いつまでにどの程度の精度で処理するように」等、明示するようにしましょう。

おわりに

澳塩さん自身、現代社会において人々がコミュニケーションをどう捉えていると感じているのか聞いたところ、「コミュニケーションの方向や目的を示す表情や視線などの言語以外の情報に注目しすぎて考えすぎ、疲れてしまう人もいれば、そこに気が付きにくく、コミュニケーションが円滑に行われぬ人もいます。コミュニケーションがうまくいかないという後者の意味にとられやすいですが、実は前者のような場合もあります。」との答えだった。

確かに、コミュニケーションは、仕事上、働く上で重要視される一方で、それ以外の場所においては希薄化する傾向にあると一般的には捉えられがちだ。良くも悪くもコミュニケーションの重要性が高まる中、人々はスキルアップに躍起になると同時に、それに疲弊しているからだ。しかし、人は一人では生きていけないという前提のもと、性別や世代等を超えて関わり合いを持つことの重要性は変わっていない。

一方で、コミュニケーションはあくまで道具に過ぎない。使用目的は人と人とが上手くやっていくため、争うリスクや疑い合うコストを減らすことであって、言葉で自分の全てを伝える必要も無ければ、相手の全てを理解する必要もない。道具である以上、使い方は誰もが学ぶことができ、いつからでも身に着けることができる。

今回、世代・性別問わず誰もが社会で生き抜くためのソーシャルスキルを獲得する方法について考察した。今、様々な立ち位置でコミュニケーションについて悩んでいる方々への一助となれば幸いです。（平岡 清香）



おくしお 澳塩 なたさ 渚さん

臨床心理士・公認心理師。大学在学中から、適指導教室にて不登校の児童生徒の学習サポートを行う。発達に偏りのある児童の家庭教師等を経て、放課後等デイサービスおよび児童発達支援事業所で、学習支援・ソーシャルスキルトレーニング等を担当。子どもたちの言葉の力を育むことが学習やコミュニケーションの充実に繋がると考え、現在は静岡市で作文読解「コミュニケーションのための学習支援教室」まなびルーム「ボラリス」を主宰。発達に偏りのある子どもたちが自分自身を適切に表現し、自立していくための育成を目指し、様々な活動を行っている。

女性の方がコミュニケーションが得意だと言われますが、そのラベリングが苦痛を引き起こすこともあります。男女問わず雑談が苦手な人もいるということも周囲は理解してください。そこにいるだけでもいい、場合によってはいなくてもいいのだ、と彼等に伝えてあげてください。また、周囲は「察して欲しい」とせずに要望を明示すること、一方で先回りし過ぎず必要とすることを聞いてあげることが大切です。

プチバトル

- いつも妹とお風呂に入る順番で揉める。「私先に入りたいんだけど」「ええ?(怒)」
- ただただ我慢(ペンネーム:なべちゃん)